社会システム論の系譜（Ⅲ）
—ヘンダーソンとパーソンズ；科学方法論をめぐって—

赤　坂　真　人

Ⅶ　ヘンダーソンの影響
Ⅷ　ヘンダーソン　イン　パーソンズ（1）
社会－精神的支援
知的影響　－科学方法論－

Ⅶ　ヘンダーソンの影響

科学哲学者として、そしてパレートの紹介者として、ヘンダーソンは1930年代のハーバードの社会科学者たちにさまざまな影響を及ぼした。とりわけ社会学では間接的な影響であったにもかかわらず、その影響はT. パーソンズによって敷衍され、社会システム、相互依存、均衡、概念図式といった概念とともに定着した。本稿はパーソンズに対するヘンダーソンの影響範囲を確定し、すでに明らかにされたヘンダーソンの知的貢献をコードとしてパーソンズの業績を解読または解釈することを主要な目的とする。

ヘンダーソンの影響の経路と範囲

パーソンズに対するヘンダーソンの影響範囲を明らかにするまえに、ヘンダーソンがハーバードを中心とした社会科学者たちに与えた影響の経路と、その範囲について述べておくことにしよう。これをもって本研究は、ヘンダーソンの紹介からパーソンズ理論の解釈へ焦点を移す。

B. バーバーによれば、[1] ヘンダーソンが影響を与えた第一の経路は、同僚や後輩とのインフォーマルな接触である。彼らのほとんどはハーバード大学の同僚や学生であるが、彼らのうちとりわけ大きな影響を受けたのはG. C. ホマンズとT. パーソンズ、歴史学者のC. ブリントンや『経営者の役割』で有名なC. I. バーナードといった人々である。またウエスタン・エレクトリック・カンパニーで行われた、いわゆるホーソーン実験に関与したE. メイヨー、T. N. ホワイトヘッド（T. N. Whitehead）、F. J. レスリスバーガー（F. J. Roethlisberger）などもここに含まれよう。[2]

ヘンダーソンの第二の影響経路は、ザ・ソサイアティ・オブ・フェロウズ（The Society of Fellows）である。ソサイアティ・オブ・フェロウズとはケンブリッジ大学トリニティイ・カレッジのプライズ・フェロウをモデルとしたもので、20～30歳の若い研究者に宿舎と俸給を与え、自由に研究をさせる一種の研究者養成制度であった。[3] へ

1) Barber, B., *L. J. Henderson On The Social System : Selected Writings*, Edited and with an Introduction by Bernard Barber, The University of Chicago Press, 1975, pp . 37-39.

2) ヘンダーソンがいわゆる「人間関係学派（Hawthorne Human Relationists）」に与えた影響は社会システム概念、論理的行為と非論理的行為、エリートの周流、均衡といったパレートの諸概念に集約される。それらについては以下の著作を参照されたい。
Roethlisberger, F. J. and William J. Dickson, *Manegement and the Worker*, Harvard University Press, 1939.
Roethlisberger, F. J., *Manegement and Morale*, Harvard University Press, 1941.
Whitehead, T. N., *The Industrial Worker*, Harvard University Press, 1938.
Mayo E., *The Human Problems of an Industrial Civilization*, Boston : Graduate School of Business Administration, Harvard University, 1946.

3) ソサイアティ・オブ・フェロウズは、ソサイアティの管理運営とジュニア・フェロウの選考を主な任務とする7人のシニア・フェロウズと（1939年からは9人）とそれぞれの関心に従って自由に研究を進める24人のジュニア・フェロウズから構成されていた。ジュニア・フェロウは20～30歳のアメリカの大学の卒業生から選ばれ、3

ンダーソンはハーバード大学総長A. L. ローウェルとともにその創設を主導し、1933年の設立から1942年に死去するまで同ソサイアティの初代議長を勤め、万事を取り仕切った。ソサイアティは研究員である24人のジュニア・フェロウズと、彼らの選考およびソサイアティの管理運営にあたる7人のシニア・フェロウズで構成された。シニア・フェロウズのメンバーのうち社会科学者はC. ブリントンだけだったこともあり、彼らに対するヘンダーソンの影響は限られたものであった。しかし彼は社会科学を専攻するジュニア・フェロウズには、とりわけ精神的支援という点で大きな影響を与えた。この経路を通して特に影響を受けたジュニア・フェロウとしてはG. C. ホマンズとW. ホワイト（William F. Whyte)、そして文化人類学者のC. M. アレンズバーク（C. M. Arensberg）などが挙げられる。

ヘンダーソンの影響の第三の経路は彼の講義である。それは主に1932年からパレートに関する私的な研究会として始められた「パレート・ゼミナール」と、学部生のために1937年から実験的試みとして開講された「入門講座・社会学23」という講義である。すでに述べたように、前者はC. ブリントン、B. A. デ・ボート、J. A. シュンペーター、T. パーソンズ、R. K. マートン、G. C. ホマンズ、C. クラックホーン、H. マーレーなどを集めて行われ、ヘンダーソンがパレート社会学を伝道する主要な場となった。後者はハーバードの学部生を対象としたものであったが、講義にはK. デーヴィス（Kingsley Davis）やB. バーバーといった大学院生や若干の教員も出席した。

ヘンダーソンの影響の第四の経路は彼の著書と論文である。しかし社会科学に関する彼の論文のうち、社会学の専門誌に掲載されたものはひとつもないし、その数も決して多くはない。また彼の社会学に関する唯一の著書である『具体社会学入門』は、彼の死後、出版のために編集し、序文を書いたC. I. バーナードの献身的な努力にもかかわらず、それを読んだ社会学関係者たちの低い評価のため出版には至らなかった。さらにパレートの紹介を目的とする『パレートの一般社会学』も、多くの読者を獲得することなくすぐに絶版となってしまったことを考えると、この経路を媒介とした彼の影響力はきわめて限定されたものであったと言えよう。だがこれらの著書・論文のいくつかは彼の同僚、とりわけパーソンズによってその重要性が示唆された結果、次世代以降の社会学者の広く知るところとなった。

年から6年の間、宿舎と食事および俸給を与えられ、自由に研究に専念することが保証された。彼らはハーバード大学のすべての講義とゼミナール、研究活動に参加することが許されており、どのような学問上の義務も課されることはなかった。唯一の義務および制限は、毎週月曜日、シニア・フェロウとジュニア・フェロウ全員でとる晩餐に出席せねばならぬことと、フェロウに採用されている期間はいかなる学位の候補者にもなることができないということのみであった。

ソサイアティ・オブ・フェロウズの創設を強力に推進したのは、ヘンダーソンとハーバード大学総長のA. L. ローウェルである。彼らはともに大学院教育に、とりわけPh. Dプログラムに不満を持っていた。彼らには、Ph. Dプログラムは二流の人材から有能な人材を大量に生産する理想的な方法ではあるが、創造的人材を育成するには不適であり、とくに学位取得のために必要な履修条件が若い優れた研究者に過重な負担を課し、彼らの生涯でもっとも生産的な時期を損っているように思われた。数少ない独創的な天才に対しては、これとは別の教育および研究体制が与えられねばならない。これがソサイアティ創設の動機であった。

ソサイアティの詳細はヘンダーソンを中心として、ケンブリッジ大学のプライズ・フェロウであった哲学者A. N. ホワイトヘッド、当時、英国に滞在していた英語学者のJ. L. ロウズ（John Livingston Lowse）そしてヘンダーソンの友人でハーバード大学の理事でもあった法律家のC. P. カーチス・ジュニアの四人が委員となって全体の構想を練った。

ジュニア・フェロウからは心理学者のB. F. スキナー（Burrhus F. Skinner)、社会学者のG. C. ホマンズ、W. F. ホワイト（William F. Whyte)、N. J. スメルサー（Neil J. Smelser)、化学者のR. B. ウッドワード（Robert B. Woodward)、経済学者のP. A. サミュエルソン（Paul A. Samuelson)、歴史学者のA. シュレジンジャー. Jr（Arthur Schlesinger, Jr.)、科学史家のT. クーン（Thomas S. Kuhn）といった優れた研究者が排出した。ザ・ソサイアティ・オブ・フェロウズの成果については、彼らの業績が雄弁に物語っている。(Homans, George C. & Bailey, Orville T., "The Society of Fellows, Harvard University, 1933-1947, " in Brinton, Crane (ed.) , *The Society of Fellows*, Cambridge, Mass : Harvard University Press, 1959. pp. 1-37.)

Ⅷ ヘンダーソン イン パーソンズ(1)

パーソンズに対するヘンダーソンの影響を検討する際に、われわれは次の事実に留意せねばならない。まず第一に、ある特定の概念なり方法なりに明らかに影響関係が見いだせる場合でも、それらは多くの場合、複数の異なった知的源泉をもつということである。例えばパーソンズの社会システム概念にはヘンダーソン、パレートの他、キャノン、古典派経済学，機能主義的人類学，さらにはホワイトヘッドの有機体の哲学までが影響を及ぼしたとされている。[4] 従ってここではそれらの人物の影響のうち、相対的な意味でヘンダーソンの影響がより顕著に見いだされる部分に注目し、両者の議論を比較検討するにとどまり、そのすべてを彼の影響に帰するものではない。

第二に、ヘンダーソンがパーソンズに与えた実質的で知的な事柄に関する影響と、彼がパーソンズに与えた社会的－精神的支援とを区別せねばならない。B. バーバーが指摘しているように、これらの二つが同時に与えられた場合、被影響者はその影響関係を強く肯定するだろう。しかし単に知的影響を受けただけで、社会的－精神的支援は受けなかったような場合には、あまり知的影響を認めたがらないかもしれない。[5]

著名な社会学者のうち、知的影響を受けたのみならず社会－精神的支援をも与えられたのはG. C. ホマンズ[6]とT. パーソンズであろう。主に社会－精神的支援を与えられた者としてはW. F. ホワイトを、[7] 特に親しくつきあうこともなく、単に知的に影響を受けた者としては当時、特別研究員であったR. K. マートンや大学院生であったK. デーヴィスなどを挙げることができるだろう。

社会的－精神的支援

それでは上記の指示に従って、パーソンズに対するヘンダーソンの知的影響を検討するまえに、彼がパーソンズに与えた社会的－精神的支援について述べておくことにしよう。パーソンズが彼の著書において、ヘンダーソンから受けた社会－精神的支援について述べている箇所を検討してみれば、それらは① パーソンズの昇進をめぐる職業上の支援 ②『社会的行為の構造』の草稿を批判的に検討するために開いた個人的な会合 ③ 医療社会学の研究に関するアドヴァイスや便宜の三つに集約されるだろう。

職業上の地位をめぐる支援[8]

1927年の秋、母校アムハースト・カレッジの経済学科の講師からハーバード大学の経済学科に、さらに1931年社会学科の新設とともに同学科の講師として迎えられたパーソンズは、そこで9年間

4) Lilienfeld, R., *The Rise of Systems Theory*, John Wiley & Sons, Inc. 1978, pp. 12-13.

5) Barber, B., op, cit., 1975, pp. 42-43.

6) ホマンズをヘンダーソンに引き合せたのは彼のチューターであったB. A. デ・ボートである。その後、彼はパレート・ゼミナールへの参加（1932)、パレートの入門書の執筆（1934)、ジュニア・フェロウへの採用（1934-1939)、ヘンダーソンの講義「具体社会学」のティーチング・アシスタント（1937）などを通して急速に親しくなってゆく。恐らくヘンダーソンの影響をもっとも強く受けたのはホマンズであると断言してもよいであろう。彼自身、自伝の中でヘンダーソンとの出会いが自分を社会学者にしたことを感謝を込めて回想している。(Homans, G. C., *Sentiments and Activities : Essays in Social Sciences*, The Free Press, Glencoe, 1962, pp. 3-7.)

7)「L・J・ヘンダーソンには、調査方法と理論を構築する上でたいへんお世話になった。彼は、ソサイアティ・オブ・フェロウズの会長として自宅で月曜夕食会を開き、まるで司祭のように万事をとりしきっていた。これにはA・ローレンス・ローウェル、アルフレッド・ノース・ホワイトヘッド、ジョン・リヴィングストン・ローウェス、サミュエル・エリオット・モリソン、アーサー・ダーヴィー・ノックなども出席していたが、なんといっても若手大学教員に人気のあったのはかれであった。わたくしが初めて出席した月曜夕食会でかれは私をつるしあげ、社会に対するわたくしの考えがいかに甘いセンチメンタリズムに根ざしているかとやりこめるのであった。わたくしは、ヘンダーソンの鋭い批判にはらを立てたこともたびたびあったが、そのつど、自分の現地調査だけはかれが言うようなものにはしないぞと決意を新たにするのであった」。(William F. Whyte, *Street Corner Society*, The University of Chicago Press, 1943. W. F. ホワイト『ストリート・コーナー・ソサイアティ』寺谷弘壬訳、垣内出版、1979年、17頁。＊傍点部の訳語は筆者。)

8) Parsons. T., *Social Systems and the Evolution of Action Theory*, The Free Press, 1977. T. パーソンズ『社会体系と行為理論の展開』田野崎昭夫監訳、誠心書房、1992年、35頁。

も講師の地位に据え置かれた。そのような処遇は人事のシステムが出来上がっていなかった当時でも異例のことであったとパーソンズは回想している。彼がようやく助教授の地位に就いたのは1936年のことであるが、その昇進は学科長のP. ソローキンの意向によるものではなく、E. F. ゲイ(E. B. Gay)、E. B. ウイルソン(E. B. Wilson)、そしてL. J. ヘンダーソンの後押しによるものであったという。

さらに決定的な出来事は1937年、パーソンズがウイスコンシン大学から教授として招聘されたとき起った。このときパーソンズはもっとも頼りにしていたゲイが、前の年、定年を迎えカリフォルニアに行ってしまっていたので、ヘンダーソンのところへ行き自らの進退について相談した。ヘンダーソンはこの問題を直接J. B. コナント学長のところへ持ってゆき、そこでパーソンズが現在就いている助教授職の二期目の残任と、二年後の終身在職資格を伴った準教授昇進を約束させたのであった。その結果パーソンズはハーバードにとどまり、生涯をここで過ごすことになったのである。その後、ハーバードを拠点として数多くの優れた同僚や学生を集め、彼らとの共同研究によって一つの学派を形成するに至った経緯を振返るとき、職業上の地位を巡ってヘンダーソンが与えた援助は、いわゆる「構造－機能学派」にとって決定的に重要な出来事であった。

『社会的行為の構造』の草稿をめぐる個人的な会合[9]

パーソンズはハーバード大学の同僚としてヘンダーソンを知ってはいたが、彼と合流したのは1932年にヘンダーソンが開始した「パレート・セミナー」においてであった。すでにパーソンズはシュンペーターの示唆を受けてパレートに関する研究を始めており、1932年には「パレートと実証主義社会学の諸問題」という論文を完成させていた。[10] だが彼らが通常の限られた応答ではなく、かなり親密なつきあいを始めたのは、上述の助教授への昇進およびその後の任用をめぐって、『社会的行為の構造』の第一次草稿がヘンダーソンに差し向けられて以来のことである。すでにパレートをめぐる論争が始っており、パレート擁護の論客となりつつあったヘンダーソンは、パレートに関する当時の二次文献とは比較にならない詳細さと洞察を含むパーソンズのパレート解釈に強く印象づけられ、パーソンズと親しく接するようになった。そしてヘンダーソンは彼の家にパーソンズを招き、週二回二時間づつ、約三ヵ月にわたって、この草稿を一節づつ批判的に検討してゆくという二人だけの私的な会合を始めたのである。このことはパーソンズにとってもなみなみならぬ経験であり、ヘンダーソンとの討論によって多くの重要な改訂が、とりわけ科学方法論とパレートの業績の解釈をめぐる改訂がなされた。パーソンズはこの討論が必要であることを気づかせてくれた改訂を終えるのに約一年を要したという。

医療社会学の研究をめぐって

1936年頃、すでに『社会的行為の構造』の草稿を書き上げていたパーソンズは、新たな研究領域へと踏み出した。それは『社会的行為の構造』で展開した行為の概念図式と、博士論文以来の関心である「資本主義の性格」を結びつけたものであり、具体的に言えば「セルフ・インタレスト」の公準の地位に関する問題であった。

従来、英米の経済学に関する議論においては、行為者による「自己利益の合理的追求」という公準が自明のものとして前提されており、とりわけマルクスとその伝統を受けついだ人たちは、近代産業社会をセルフ・インタレストという概念によって特徴づけ、営利企業をこれらのセルフ・インタレストを組織化する典型的単位として扱う傾向があった。それに対しパーソンズは、近代産業社会において重要性を増しつつある専門職というカテゴリーを対置した。資本主義社会において専門職は私的営為でありながら、クライエントに対しては非営利的かつ公平無私(disinterested-

9) Parsons, T., *The Structure of Social Action*, McGraw-Hill ed., 1937. T. パーソンズ『社会的行為の構造』稲上毅・厚東洋輔・溝部明男訳　木鐸社、1976～1989年。第一分冊、14頁。
————., 前掲書、1977年。邦訳、34-35頁。

10) 高城和義『パーソンズとアメリカ知識社会』岩波書店、1992年、89頁。

ness）な態度で接する傾向を強くとどめている。もし近代産業社会がセルフ・インタレストの合理的追求によって特徴づけられるなら、明らかにそれと矛盾する専門職が、資本主義の繁栄とともにますます重要性を増しつつあるという事態はいかに説明されるのか。このことが彼の根本的な問題意識であった。

この問題の解明にむけて、パーソンズは専門職の研究に乗り出したのであるが、そこで選択されたフィールドが医療専門職であった。彼はほかならぬ医師自身が、この医療専門職をどのように考えているのかを明らかにするために、参与観察によって医療の現場を観察しながら、専門別医療の各種タイプを代表するように選定された、かなりの数の医師にインタビューを試みた。[11]

それでは、数ある専門職のうちなぜ医師が選択されたのだろう。パーソンズによれば、彼自身カレッジに入学した当時、医学の研究を志していたこと、彼の兄と義父が医師であったことなどを動機として挙げているが、それに加えて彼自身が援助を求めたL. J. ヘンダーソン、そしてその友人であったE. メイヨー、W. B. キャノンがいずれも医学と深いつながりをもっていたことが決定的であった。[12]

とりわけヘンダーソンは、1935年に「社会システムとしての医者と患者」という注目すべき論文を書いており、そこで彼の医学的関心と社会学的関心とを結びつけていた。パーソンズは医療社会学の研究計画について彼らと相談したが、わけてもヘンダーソンは「医療活動に関する研究の全分野にわたって、私のもっとも重要な相談相手の一人であった」と回想している。具体的経験的調査を重視するアメリカにあって、絶えずそのプレッシャーにさらされ、[13] しかも厳格な実証主義を標榜し、現場に習熟した実務家を高く評価するヘンダーソンに援助を求めたパーソンズにとって、医療専門職の実証的調査・研究は、自己の将来をも左右しかねない要素を含んでいた。

パーソンズはこの調査をマサチューセッツ総合病院を中心として行った。[14] この病院はハーバード大学医学部と特別の関係を有しており、かつてヘンダーソンが1913年～1915年にかけて、同病院の研究員であったW. パルマーとアシドーシスに関する共同研究を行った病院であり、1916年には腎臓病の臨床的研究を、さらに1920年にA. ボックと血液に関する共同研究を実施した病院である。恐らくヘンダーソンは同病院と深いつながりを持っており、パーソンズのフィールド・ワークにも何らかの便宜を与えたに違いない。

知的影響

パーソンズに対するヘンダーソンの知的な影響範囲を同定する作業は、ある意味で容易である。というのもパーソンズは、観念の出自を比較的明瞭に記述しているからで、そのような影響関係についての直接的な言及やその他の引用箇所を調べ、それらがどのような脈絡で語られているかを分析すれば、大雑把ではあるが影響範囲を特定化することができるだろう。しかし、にもかかわらず、そのような言及は主観的な判断によるものであるし、最晩年に至ってようやくヘンダーソンの重要な影響に気づいたという「行為体系に対する有機的世界と物理的世界の関係の問題」のように、本人がその影響関係に気づいていない場合もあるだろう。しかしここでは少々安易ではあるが、彼の著書におけるヘンダーソンの引用箇所の分析によって特定された項目にしがって、両者の影響関係を検討してゆくことにする。[15] 引用箇所の分析から特定された項目は次の通りである。①

11）Parsons, T., "An Approach to Psychological Theory in terms of The Theory of Action," Koch Sigmund (ed.), *Psychology,* 1959. *Social Structure and Personality*, The Free Press of Glencoe, 1964.『社会構造とパーソナリティ』武田良三監訳、新泉社、1973年、430-431。前掲書、1977年。邦訳、40-41頁。

12）Parsons. T., 前掲書、1964年、邦訳、435頁。前掲書、1977年、邦訳、41頁。

13）恐らく医療専門職の調査は、パーソンズが自ら現場へでかけ実施した唯一のものであろう。パーソンズはなぜこのような調査を行ったのかについて、実証的研究を重視するアメリカ社会学のプレッシャーに対する反発が一つの要因であったことを自伝において述べている。さらにそれは自らの職業上の地位の不安定さを顧慮した結果でもあったろう。（高城和義、前掲書、1992年、125頁。）

14）Parsons. T., 前掲書、1964年、邦訳、435頁。

15）Parsons, T., 前掲書、1977年、邦訳、36-37頁。

科学方法論 ② パレート ③ 社会システム ④ 医療社会学 ⑤ 有機的世界と物質的世界の境界と関係 ⑥ 恩恵に対する感謝・その他。[16] なお⑥についてはすでに言及したものとしてここでは扱わない。

科学方法論

分析的実在主義の形成

パーソンズの方法論的立場は「分析的実在主義(Analytical Realism)」と呼ばれる。自伝によれば、彼はこの立場にM. ウェーバーの「理念型」の考察を含む学問論、L. J. ヘンダーソンの「事実と概念図式についての陳述」、そしてA. N. ホワイトヘッドの「具体性置き違えの誤謬」を含む『科学と近代世界』を経由して到達したという。[17]

「分析的実在主義」とは、基本的に理論を構成する諸概念の「分析的抽象性」と、概念に対応する具体的事象の「実在性」という二つの異なった要請を結びあわせたものである。このうち概念の分析的抽象性は「経験主義」批判から、[18] 概念の実在性はM. ウェーバーの「理念型」批判より導かれた要請である。以下、分析的実在主義に含まれる要請を精密に把握するため、しばしパーソンズによる批判の軌跡をたどってみることにしよう。

パーソンズによれば経験主義には① 実証主義的経験主義 ② 個別主義的経験主義 ③ 直観主義的経験主義 の三つのタイプが存在する。まず第一に実証主義的経験主義とは、抽象的な一般理論概念の重要性を認めるものの、具体的事象の一部分を抽象化することによって得られた概念を具体的事象そのものと取り違え、これを実体化する傾向が著しい立場をさす。具体的には『科学と近代世界』のなかでホワイトヘッドが痛烈に批判した機械論的な近代科学、とりわけ古典力学や、功利主義思想に基づいて展開された古典派経済学がそれにあたる。[19] このタイプの経験主義は、いわゆる「具体性置き違えの誤謬」を犯すことによって、抽象的な概念に不当な具体性を与え、結果として信じ難いほど歪曲された世界像を現前させる過ちを犯した。

次に個別主義的経験主義と呼ばれるものは、

16) パーソンズの著書における引用回数とその内訳は次の通りである。もちろんこれは単に索引を利用してカウントしたもので正確とは言い難い。とりわけ『行為理論と人間の条件』においては、単なる引用ではなく、実際にヘンダーソンの著作について議論を展開しているので、引用箇所として扱うことができない。

1937 The Structure of Social Action.	8
1949 Essays in Sociological Theory.	2
1951 The Social System.	3
1951 Toward a General Theory of Action.	1
1962 Theories of Societies.	2
1964 Social Structure and Personality	2
1973 The American University.	1
1977 Social Systems and The Evolution of Action Theory.	15
1978 Action Theory and The Human Condition.	17

1. 科学哲学・方法論 (10)　2. パレート (7)　3. 社会システム (6)
4. 医療社会学 (4)　5. 物理的世界と有機的世界 (22)　6. その他 (3)

17) Parsons. T., 前掲書、1977年、邦訳、32頁。

18) ここで「経験主義」という用語が特殊な意味で使われていることに注意せねばならない。すなわち「経験主義という言葉は、ある理論体系の諸範疇だけで、それが適用される総体に関しておよそ科学的に重要な諸事実はすべて説明しつくせるのだと明示的にか暗黙的にか主張するような理論体系を指示するために用いられる」。(Parsons, T., 前掲書、1937年、邦訳、第一分冊、113頁)。

19) ホワイトヘッドによる近代科学批判は、彼が「科学的唯物論」と呼ぶ、原子論的でかつ機械論的な宇宙論に焦点が定められていた。科学的唯物論とは、配列が絶えず変動しながら空間全体に広がっている、それ自体としては感覚も価値も目的もない単なる物質が、その存在の本性には由来しない外的関係によって課せられた一定の運動を繰り返しているにすぎないという宇宙観を言う。このような世界像をホワイトヘッドは、まったく信じ難いものであり、それは「時空のなかに単に位置を占める〈物質〉」という科学的抽象概念を不当に強調し、これに誤って具体性を与えた結果であると批判した。これがいわゆる「具体性置き違えの誤謬」に他ならない。(Whitehead, A. N., *Science and the Modern World*, New York : Macmillan, 1925. A. N. ホワイトヘッド『科学と近代世界』上田泰治　村上至孝訳、松籟社、1981年、23頁、72頁)。

「ヒュームの懐疑主義に対応する方法論的立場」で、[20] 認識は感覚・知覚器官を通して得られた印象の累積により成立すると考える極端な経験主義をさす。この立場は主観の側での一般的範疇（category）や枠組（frame）による経験の秩序づけ、すなわち認識の主観的構成を認めず、認識の成立根拠を経験にのみ求める。そこから「事象は観察され記述され、時間の経過のなかで位置づけられるにすぎない」と考えられ、[21] しかもそのようにして得られた知識が唯一客観的な知識とみなされる。言うまでもなくこのようなタイプの経験主義は、認識の成立根拠とされる経験そのものが、なんらかの一般的諸概念を前提としなければ成立しないことを見落している。一般的諸概念の否定は、認識とはほど遠い単なる印象のモザイクを帰結し、結果的に理論化への道を閉ざすという点でとうてい受容されえない。

最後に直観主義的経験主義とは、社会科学的認識の目標は自然科学のような普遍的法則の認識ではなく、個々の歴史的事象の個性を把握することにあると考えることから、「社会科学の領域において概念的要素の存在を許容するが、その概念の個性的性格」を強調し、具体的な「現象を分解して何らかの一般概念に包摂するような試みは個性を破壊する企てである」として、概念の分析的抽象性を否定する立場を言う。[22] このような立場は、広い範囲の具体的現象に適用可能な一般理論の構築に関心を寄せる「分析的諸科学」の論理としてはまったく不当であるのみならず、知識の妥当性の証明に必要な一般的、理論的諸概念を欠くという点で、特殊な具体的事象の因果関係の理解をめざす「歴史的諸科学」の論理としても妥当性を欠くものとパーソンズは批判した。[23]

ウェーバーもまたパーソンズに先立ち経験主義を徹底して批判したが、その批判は彼自身がドイツ歴史学派の影響下にあったことから、主に歴史主義の方法論をめぐって展開された。この批判においてウェーバーは、自然現象と同じような規則性を持たない人間行為についての研究は、個別的な事象の記述に自己を限定すべきであるとの要請や、人間的事象の把握において前提とされる本質直観的理解の方法に論難を加え、歴史的説明のあらゆる論証可能な判断は一般的、理論的諸概念なしには不可能であり、意味知覚の直接的明証性と、それに基づく本質直観的理解の方法によって得られた知識は、理論的諸概念の合理的に首尾一貫した体系と関係づけられなければ妥当性を獲得しえないことを論証した。

これによってウェーバーは、経験主義において見失われた、認識における抽象的一般概念の重要性を回復させることに大きく貢献した。だがパーソンズによれば、ウェーバーは次の一点で重大な誤りを犯した。すなわち彼は「概念を実在の反映とは考えずにむしろ〈有用な虚構〉とみなす」立場を取ったのである。[24] これに対しパーソンズは、「科学の一般概念のいくつかのものは決して虚構ではなく、客観的な外的世界の諸側面を適切に〈把握する〉ことができる」として、[25] ウェーバーの概念の虚構説に強く反対し、科学的概念の実在との対応性を、すなわち「概念実在論（Begriffsrealisms）」の立場を明示した。

以上の三つの経験主義批判とウェーバーの理念型批判に、われわれは次のような要請を看取することができる。すなわち第一に、実証主義的経験主義における概念の実体化に対する批判から、「科学的認識および概念は抽象的である」との「抽象主義」の要請を、第二に、個別主義的経験主義における認識論的経験論の批判から、「科学的認識は主観において合理的に構成された、一般概念による経験的データの秩序づけによって成立する」という「構成主義」の要請を、第三に、直観主義的経験主義における科学的認識の個別具体性批判から、「科学的認識および概念は普遍的である」とする「普遍主義」の要請を、そして最後に、ウェーバーの理念型論において主張された概念の虚構性に対する批判から、科学的概念は実在との

20）Parsons, T., 前掲書、1937年、邦訳、第五分冊、136頁。
21）Parsons, T., 前掲書、1937年、邦訳、第五分冊、137頁。
22）Parsons, T., 前掲書、1937年、邦訳、第五分冊、138頁。
23）Parsons, T., 前掲書、1937年、邦訳、第四分冊、193-194頁。
24）Parsons, T., 前掲書、1937年、邦訳、第五分冊、137頁。
25）Parsons, T., 前掲書、1937年、邦訳、第五分冊、138頁。

対応を有するという「概念実在論」の要請を看取できる。

分析的実在主義

こうしてたどりついた分析的実在主義の立場は、具体的に次のように表現できるだろう。「理論や概念は本質的に抽象的であり、いかに総合しようとも決して具体的現実そのものの反映とはなりえない。したがって、そのままの形では経験的実在のなかにその対応物を見いだすことはできないが、それは決して概念が現実の恣意的な歪曲であったり、単なる虚構であることを意味するものではない。科学的理論や概念は実在の諸側面を適切に把握しうるものであり、具体的な事象から分析的に分離された諸要素との部分的対応という限定された形ではあるが、実在との対応を有するものである」。

すでに述べたように分析的実在主義は、科学的概念の「分析的抽象性」を強調する立場と、それらの概念の「実在性」の主張とを結びつけたものである。ここで前者は、われわれの思惟や体験を秩序づける概念は抽象的なものであるか、それとも個別具体的なものであるかという「概念化の方法」の次元に関わり、後者は、それらの概念は実在との対応性を持つか、それとも単なる虚構であるかという「存在論」の次元と関わる議論である。しかもパーソンズにおいて、後者の「実念論－唯名論」という存在論の次元での選択は、われわれの思惟や観念から独立した客観的世界が実在するか、それとも現実とは単にわれわれの意識の所産であるかという、「認識論」的な意味での「実在論－観念論」における選択を含んでいる。[26)]

以上のように、パーソンズの分析的実在主義には、明らかに（概念化に関する）方法論・存在論・認識論という異なったレヴェルにおける議論が含意されている。恐らく、これらの異なったレヴェルの議論を同一平面で展開したことが、彼の認識論、方法論的立場の明瞭な理解を妨げた最大の原因であろう。もしパーソンズがこれらを明確に区別し、個別に議論を展開していたなら、彼の立場は容易に理解されていたにちがいない。[27)]

ここでわれわれは、以上のようなパーソンズの立場とヘンダーソンのそれとの比較に進むまえに、分析的実在主義という命名が示唆するさらなる含意に留意せねばならない。すなわち、単に概念が抽象的で普遍的であるというだけなら理念型も同様である。だが理念型は有益な「虚構」であり、他方、分析的概念は「実在」と対応するものと主張される。この相違は何に由来するのであろうか。結論を先取りして言えば、この概念の実在性を保障するものこそ、概念の「分析的特性」なのである。

パーソンズによれば、理念型が虚構である最大の原因は、それが「（部）類」概念をメタ理論とし

26）Parsons, T., 前掲書、1937年、邦訳、第五分冊、170頁。

27）分析的実在主義に関する議論を、これら三つのレヴェルで個別に展開した場合、われわれは彼の科学方法論上の立場を次のように再編成することができるだろう。

1．概念化の方法としての「抽象的構成主義」

科学とは、われわれの主観において合理的に構成された抽象的諸概念および理論によって、実在を主観的に再構成する営みである。概念および理論は実在の一定の特徴を選択し表象することによって創り出されるものであり、実在の反映ではありえない。概念と実在の完全な対応は論理的に不可能であり、またそのような企ては理論や概念による「世界の自由な分節化」の可能性を閉ざし、その創造力を損うという意味で認められない。

2．存在論的前提としての「実念論」

理論や概念は抽象的であることを本質とする以上、そのままの形で経験的実在のなかに対応物を見出すことはできない。しかしそのことは決して概念による現実の恣意的な歪曲や、概念の虚構性を意味するものではない。科学的概念や理論は、現実の諸側面を適切に把握するものである。逆に言えば、経験的現実を適切に把握しえない概念は科学的に無意味であると言えよう。だが、この概念と実在との対応性は両者の完全な対応ではなく、あくまでも具体的事象から分析的に区分された要素との部分的対応である。

3．認識論的前提としての「実在論」

世界は単なる我々の思惟や意識の所産ではなく、それ独自の客観的存在として実在する。ゆえに認識は思惟や意識といった主観に、客観的実在として存在する事物や事象が与えられることによって成立するのであり、後者が前者に還元される（＝観念論）ことはありえない。すなわちパーソンズの用語で言えば、思惟による「論理的秩序（logical order）」とは別に、実在の「事実的秩序（real order）」が存在する。後者は前者に反映されるが還元されはしない。

て構成された「類型」概念であることに由来する。[28] 論理学的に言えば、「類」概念は「種」から「個」へ特殊化される普遍概念であり、逆に言えば、「種」や「個」は「類」の外延を構成する関係にある。したがって、もし理念型が「類」概念であるとすれば、その特殊的要素（すなわち理念型の実質的内容）は、類型の外延にあたる「具体的実体」で構成されねばならない。例えば「カリスマ的支配」という類型の特殊は、ヒトラーの第三帝国支配や、ある教祖による教団支配といった具体的事例で構成される。だがこのとき、これらの事例をもとにして構成された理念型は、事例の多様な属性から特定の観点を価値関心に従って一面的に選択し、それを論理適合的に整合化することによって構成した「仮説的実体」であるがゆえに、理念型と一致する事態そのものを現実に見い出すことはできない。すなわち理念型は具体的事例に適用し、その偏差によって事例の個性を認識することを目的とする概念であり、それによって事例の具体的属性を記述することはできないのである。

それに対して「分析的概念」は類概念ではなく、「現象の具体的属性あるいは性質」を抽象化した概念である。[29] 従って分析的概念の特殊的要素は、「ある対象のある属性に関する具体的な値」で構成されるのであり、何らかの実体を値としてとることはない。例えば太陽の「質量」という場合、それによって記述されるのは、太陽の具体的な質量の値であり、太陽そのものが「質量」の外延であるわけではない。すなわち分析的概念は具体的事例を、ある属性に即して適切に記述するという意味で「実在と対応する」のである。もちろん分析的要素を組み合わせて、対象を分類することも可能である。だが分析的概念は、第一義的に「分類」ではなく「記述」に指向する概念である。すなわち、ある対象を属性の観点から部分へと分解（すなわち分析）し、それぞれを具体的な値（または事実）で記述する。この単なる抽象性をこえた分析的性質を持つがゆえに、この概念は「分析的(Analytical)」と命名されるのである。もちろん、これらの分析的諸概念は体系的に総合されてこそ、対象に関する十全な記述を可能とする概念装置となるものであることは言うまでもない。

事実と概念図式

それでは次にパーソンズの分析的実在主義に影響を与えたという、ヘンダーソンの「事実と概念図式についての陳述」を開題し、両者の並行性を検討してみることにしよう。

「事実とは〈概念図式を用いてなされた現象に関する経験的に検証可能な言明〉」[30] であるという陳述には、次のような主張が含意されている。まず第一にこの陳述は、「事実とは現象そのものではなく、観察者の概念図式に基づいて選択的に知覚され、かつ述べられた現象についての命題である」という、事実の ① 主観的構成性と ② 抽象性が含意されている。概念図式とはわれわれの認識目的にとって有意味な要素を選択的に知覚し、分節化することを可能とする準拠枠であり、われわれはこの抽象化されパターン化された知の枠組によって、無定形な体験を何らかの意味を担ったまとまりへと（主観的に）構成し、事実として呈示する。この過程において、われわれはこの「事実」を何らかの記号を用いて分節化するのであるが、すでに述べたように、その分節化は概念図式に基づく「選択的」な表象であるがゆえに、必然的にこの事実においては言及されない多くの側面の捨象を伴う。このような概念図式に基づく選択的知覚および記号的表象化という意味において、「事実」は本来的に抽象的な性質をもつ。

第二に、この陳述は「事実とは経験的に検証可能な言明である」とする ③ 実証性の要請と、したがって「事実とは、われわれの思惟や観念とは独立に存在する実在についての言明である」とする、認識論的前提としての ④ 実在論 を含意する。まず事実言明の実証性についてであるが、この要請は、ヘンダーソンがH. ポアンカレに言及しつつ述べたところの、「概念図式の規約性」[31] と

28）Parsons, T., 前掲書、1937年、邦訳、第四分冊、214-225頁。
29）Parsons, T., 前掲書、1937年、邦訳、第四分冊、221-222頁。
30）Parsons, T., 前掲書、1937年、邦訳、第一分冊、74頁。

対をなすものとして理解されねばならない。すなわちヘンダーソンにとって概念図式は、「実際の分析に有効である」という規準に基づいて恣意的に構成されうるものであり、有効性が確認されなくなれば修正または廃棄されるべきものである。この規約性は自由な理論構成を保障するという点では有益であるが、同時に「規約の恣意性」、すなわち「有効である」という理由でもって、無数の恣意的な概念図式が乱立する可能性を生じさせる。ヘンダーソンによる、規約性を前提としたうえでの実証性の要請は、彼が、理論や概念の恣意的構成を認めることで理論の創造性を確保しつつ、他方、検証可能性という限定を加えることで規約の恣意性を制限しようとする、「より洗練された帰納主義」の立場を取っていたことを示すものである。

ところで、この「命題の検証可能性」の規準は、必然的に認識論的意味での「実在論」を前提とする。なぜなら自明の理ではあるが、形而上学的命題の場合を除いて、その命題が述べている事態が、われわれの思惟や観念とは独立して客観的に実在することを前提としなければ、経験的検証を主張することはできないからである。

分析的実在主義とヘンダーソン

以上、「事実と概念図式に関する陳述」が含意する① 抽象主義 ② 構成主義 ③ 実証主義 ④ 実在論 という四つの要請を、パーソンズはすべて共有する。恐らくヘンダーソンのこの陳述がパーソンズに与えたもっとも重要な影響は、「理論の分析的抽象性」をあらためて自覚させたことであろう。[32] パーソンズによれば、ウェーバーは体験(Erleben)と認識(Erkennen)とを区別し、体験は一般的諸概念に関係づけられてはじめて経験となるものであること、したがって経験はそれ自体、決して「生のもの」ではありえず、概念図式によって選択的に知覚され、ひとつの意味をもったまとまりとして構成されたものであることを正しく指摘した。[33] にもかかわらず彼は、認識の対象となる経験の価値関心による選択という観念にとらわれ、結果として、経験それ自体が一般的な概念図式によって決定されているという事実を十分に強調しえなかった。[34]

これに対しヘンダーソンは、われわれが「事実」として呈示するあらゆる観察結果は、現象そのものではなく、観察者の概念図式に従って主観的に構成されたものであることをくりかえし強調した。単に認識の主観的構成というだけなら、I. カント(Immanuel Kant)の議論ですべては尽くされよう。だがヘンダーソンにおいては、体験を整序し、事実として呈示することを可能とする主観的カテゴリーやフレームは、カントのように先天的な形式として備っているものではなく、それ自体、観察者の主観において恣意的に構成され、場合によっては修正もしくは廃棄されうる仮設的概念として捉えられている。前号において述べたように、ヘンダーソンにおいては、規約的な概念図式を何かある形而上学的実在の記述と考えることは不当であり、そのような試みは、まさに概念を実体化する危険をはらむものと考えられたのであった。[35]

それでは次に、この陳述に含まれる「実証主義と実在論」の要請が分析的実在主義に対して持つ意味を考察してみよう。

一般に、パーソンズの方法論が論じられる場合、論者はパーソンズ理論の高度な抽象性に注意を奪われ、結果として概念の分析的抽象性がもつ方法論的意味にのみ注目する傾向がある。しかしながら、ほんらい分析的実在主義の根幹は、この実念論および実在論にこそ求められるべきなのである。世界は我々の思惟や観念に還元されえないそれ独自の実在である。概念はそれを把握するための道具にすぎず、実在そのものを創造する要因ではありえない。「分析的」という形容詞が概念の

31) Henderson. L. J., *Sociology 23 Lectures*, 1941-42 edition, in Barber, B., *L. J. Henderson On The Social System : Selected Writings*, Edited and with an Introduction by Bernard Barber, The University of Chicago Press, 1977, p. 76.
32) Parsons. T., 前掲書、1977年、邦訳、32頁。
33) Parsons, T., 前掲書、1937年、邦訳、第四分冊、192頁。
34) Parsons, T., 前掲書、1937年、邦訳、第四分冊、178頁。
35) Henderson. L. J., op. cit., 1941-42 edition, in Barber, B., op. cit., 1977, p. 76.

抽象性を、さらにはその虚構性を連想させるがゆえに、「実在主義」というタームとの接続に一瞬とまどいを覚えるが、ウェーバーの理念型批判で明らかなように、この立場に唯名論的なニュアンスは微塵も含まれていない。むしろ「分析的」という形容詞は、ホワイトヘッドの「極度の抽象は具体的事実についての、われわれの思考を統御するための絶好の武器であるという逆説」としてポジティブに読まれるべきなのである。[36]

分析的実在主義の問題

このような実念論および実在論の強調は、明らかに自然科学的認識論・方法論をモデルとした結果である。論理的側面における社会科学と自然科学の区分を認めないパーソンズにあっては、単に「科学」を前提とした立場であると言えようか。[37]「この〈社会的行為の理論〉は経験科学のひとつの理論である」という言明に明らかなように、[38]パーソンズは彼の行為理論を、そして社会学を科学として基礎づけようとした。

くりかえし述べてきたように、(自然)科学は実在論および実念論を前提とする。すなわち概念は必ずその指示物を有するものと前提する。もし指示物の存在が何らかの方法で確認されないならば、理論や概念は単なる仮説にとどまるかまたは形而上学的思弁として退けられてしまうだろう。

対照的に哲学や宗教といった形而上学の場合、概念は必ずしも経験的対応物を持つ必要はない。例えば「神」という宗教的概念は、共同体のメンバーによって共同主観化され、主観的実在性を確保すればじゅうぶんである。なぜなら、それらは科学的概念のように認識を指向するものではなく、評価を第一義的に指向する概念であるからだ。つまり宗教的信念における「神」という記号は、信者に内面化され人々の心理的緊張を緩和したり、共同体の統合を達成することが重要なのであって、「神の実在の確認」は信仰を強化するという二義的な意味しか持たない。

だが社会学の諸概念はどうであるか。社会学が科学であることを強調するならば、上に述べた理由でわれわれは実在論を採用せねばならない。科学にこだわるパーソンズは、明らかに実在論の立場をとった。彼は社会の実在性について、しばしばデュルケームの「社会はそれ〈独自の実在〉(a reality *sui generis*)である」という言明を引用する。[39] デュルケームが「社会を物のように観察する」と述べた時、そこには、社会的事実は物のような実体性〈感覚的知覚によって認知される性質〉を持たず、「外在化された集合意識による個人の意識や行動の拘束」という事実においてのみ存在が確認されるとの意味が含まれていた。しかし、それは同時にそのような形においてではあれ、我々の意識や行動を拘束する何かが実在することを強調する視点をも含んでいた。その何かを彼は「集合意識」と呼んだが、その実在を前提とするという意味で彼は実在論者である。[40]

デュルケームと比較するとウェーバーには「実在としての社会」という視点が前面に出てこない。方法論的個人主義と呼ばれる行為還元論的見解を示すウェーバーにあって、国家といった社会

36) Whitehead, A. N., 前掲書、1935年、邦訳、44頁。

37) パーソンズによれば、自然科学と社会科学は、認識の対象となる事象の性格、すなわち経験的データの規則性の程度が異なるだけで、「基本的論理的諸点については、自然科学と社会科学の間に差異はない」。(Parsons, T., 前掲書、1937年、邦訳、第四分冊、232頁)。ここで「論理的諸点」とは、分析的実在主義が含意する科学的概念および認識の主観的構成性、抽象性、普遍性などをさしている。

分析的実在主義が依拠する認識論はカントの構成主義である。ハバーマスが指摘しているように、カントの「可能的認識の諸条件についての先験論理学的な問いは、同時に認識一般の意味の解明を目指していた」のであるが、実際のところ、彼は「暗黙の内に科学の規範的概念を同時代の物理学によって与えられていた」。(Habermas, J., *Erkenntnis und Interesse*, Frankfurt am Main, Suhrkamp, 1968. ユルゲン・ハバーマス著『認識と関心』奥山次良〔他〕訳　未来社、1981年、75頁)。このようなカントの認識論を土台として、生化学者のヘンダーソン、さらには物理学者のホワイトヘッドの認識論や方法論によって骨格を組み上げた分析的実在主義は、当然のことながら自然科学の論理に基づいている。

38) Parsons, T., 前掲書、1937年、邦訳、第一分冊、12頁。

39) Parsons, T., *The System of Modern Societies*, Prentice-Hall, Inc., 1966. T. パーソンズ『近代社会の体系』井門富二夫訳　至誠堂、1977年、10頁。

40) Durkheim, E., *Les Règles de la méthode sociologique*, F. Alcan, Paris, 1895. E. デュルケーム『社会学的方法の規準』宮島喬訳　岩波書店、1978年、第2章。

的集団は「或る人々が、国家は存在するものである、いや、法律的秩序が効力を持つのと同じ意味で存在すべきであるという観念に自分たちの行為を従わせているお陰で、人間の特殊な共同行為のコンプレックスとして存在」するのであり、われわれが主観的にその実在を信じないかぎり存在しえないものである。[41] すなわち彼にとっては、人間の絶えざる意味づけとその共同主観化こそが、社会的客体を存在せしめる第一義的な条件なのである。P. L. バーガー（Peter L. Berger）はそれを社会現象の「主観的基礎」と呼んだが、[42] ここに社会学において観念論が生き残る余地がある。すなわち社会学の認識対象である「社会的事実」は、先天的に備っている身体的な感覚および知覚能力、すなわち丸山圭三郎の言葉でいえば〈身分け構造〉によって把握されるものではなく、言語による主観的規定〈言分け〉によって現前する存在だからである。[43] もちろん自然科学の対象としての自然的客体の場合も、言語的な分節化によってわれわれの主観に現前するのではあるが、それは言語的分節化以前に実在すると前提される客体に、概念が適切な規定を与えた結果、われわれの意識にとらえられるようになったという意味での現前にすぎない。それに対し社会的客体の様相は、われわれの言語的規定および意味づけによって大きく変化する。極端な観念論の立場に立てば、社会はラング〈諸民族に特有の言語で規定された人間関係についての規約〉にすぎないものとして、単なるコトバに還元する見解さえ引き出せよう。[44]

しかし実在論の立場をとる限り、この言語的分節化の恣意性と、それに伴う客体の様相の変化という問題は回避される。なぜならパーソンズの言葉で言えば、われわれの主観において構成した論理的秩序（logical order）以前に、実在そのものの事実的秩序（real order）が厳然と存在し（＝実在の認識に対する先行）、前者は後者を反映するという意味で無限の多様性を示すことはありえないと考えられるからである。

以上のように実在論は、一般に概念を、それに先立って存在している実在に適切な名称と意味内容の規定を与える、単なる「命名目録」と考える伝統的な記号観に立つ。しかしながらこのような立場は、必然的に「言語的分節化による指向対象の創造」という視点、すなわち「社会的事実に関する我々の主観的な概念化が、同時に社会的事実を創造する（＝認識と実在の同時性）」という視点を背後に押しやってしまう。パーソンズの概念図式論は、認識対象の性質と範囲が概念図式によって規定されることを正しく指摘しているが、それは、あくまでも「観察者が概念図式を構成する以前に存在している」社会的客体を把握するための図式であって、存在論的な意味で「認識の対象を積極的に創造する」ものではない。

「概念の意味を変更する」ことや「視点をずらす」ことで「今まで見えなかったものが見えてくる」という場合、それは「隠れていたものに光をあてる」という意味ではなく、「見慣れたものが、新しい意味を担って、まったく異なったものとして見えるようになった」ということであろう。すなわち視点そのものが客体を創造するのである。だが、自然科学的実在論をとるパーソンズの分析的実在主義においては、所与の社会的事実の解読（コードに照してテクストの一義的な意味を探ること）に限定され、解釈（コードを自由に創造し、テクストをふくらませながら創造的に読むこと）はなしえない。したがって、社会学のひとつの課題である「自明的意味世界の相対化」、すなわち社会的事象を意味付与的に解釈することで既存の解釈を相対化し、その自明性を問い返すことによって社会的意味世界の再活性化をはかる知識社会学的視点が抜け落ちる。いわゆる意味学派（現象学的社会学・象徴的相互論・エスノメソドロジー等）によるパーソンズ批判は、なによりもこの文脈において読まれねばならない。

41）Weber, Max., "Soziologische Grundbegriffe, " *Wirtshaft und Gesellshaft*, Tübingen, J. C. B. Mohr, 1922. マックス・ウェーバー『社会学の根本概念』清水幾太郎訳　岩波書店、1972年、24頁。
42）Berger. P. L., *The Sacred Canopy–Elements of a Sociological Theory of Religion*, Doubleday & Co., N. Y. 1967. P. バーガー『聖なる天蓋』薗田稔訳　新曜社、1979年、5頁。
43）丸山圭三郎『文化のフェティシズム』紀伊國屋書店、1984年、119頁。
44）丸山圭三郎、同書、113頁。

補論：概念図式と理論の関係

以上、ヘンダーソンを導きの糸として、パーソンズの方法論的基底としての分析的実在主義の含意を精確に把握する作業を進めてきた。ここで本稿を閉じる前に、「概念図式と理論」の関係について整理しておくことにしよう。というのも、この両者を明確に区別せずに、両者を互換的に使用したことが、パーソンズ理論に関する誤解のひとつの源泉となってきたと考えるからである。

パーソンズにおける理論というタームめぐって、もっとも執拗な批判を繰り返したのはG. C. ホマンズである。彼によれば、パーソンズは理論を単なる一般化され、論理的に関連づけられた諸概念の総体と考えており、単なるカテゴリーの組み合わせにすぎない概念図式を「理論」として呈示した。真の理論とは「説明と予測」を可能とする検証可能な因果的命題を含むものでなければならないが、そのような命題を欠き、かつ演繹することさえ不可能なパーソンズ理論は真の理論たりえない。[45]

これに対しパーソンズは、理論とは「経験との対応をもった〈一般概念〉が論理的に相互に関係づけられたもの」という定義でじゅうぶんであり、[46] 科学哲学者のC. G. ヘンペル（Hempel, C. G.）E. ネイグル（Ernest Nagel）、そしてG. C. ホマンズらが主張した、「初期条件への適用により〈説明と予測〉の演繹を可能とする普遍的命題の立言集」のみを理論と考える立場を、「不必要に厳密と思える妥当性の基準」としてこれを退けた。[47]

それではこのように定義される、パーソンズにおける意味での「理論」と「概念図式」とはいかなる関係にあるのか。パーソンズによれば、一般に理論は、相互に関係づけられた理論的命題の閉じたシステムを形成する。ここで理論的命題とは「事実に関する言明そのもの、または事実間の関係様式についての言明」であり、[48]「事実」とは、すでに述べたように「概念図式を用いてなされたところの現象についての経験的に検証可能な言明」である。[49] したがって概念図式は理論体系を構成する理論的命題を創造する手段として位置づけられる。この文脈では理論と概念図式の関係が目的－手段という関係によって区別されていることに注目しておこう。

この概念図式には三つの主要なタイプが存在する。第一の概念図式は「記述的準拠枠」と呼ばれるもので、それは「外在的実在を選択的に秩序づけ」[50]、「説明すべき対象を定義」し、「科学的関心の対象」を形成する機能を有するものである。[51] だが概念図式は、分析目的に応じた外的実在の選択的秩序化にとどまるものではない。それは対象を説明する目的をもって構成される場合もあり、その結果生じる概念図式は、「部分あるいは類型概念」および「分析的概念」と呼ばれる。[52]

概念図式としての類型概念および分析的概念についての明確な定義はなされていないが、それらはウェーバーの理念型と、自らの行為の準拠枠に示される分析的意義を有する概念図式を想定しているものと考えて良いだろう。パーソンズは分析的概念を、「特定の事例の特定の〈値い〉においてのみ観察しうる」、ある一般概念としての分析的要素が論理的に関係づけられたものと定義しているが[53]、それは実質的に、彼が「理論」に与えた定義に等しい。したがって、概念図式のタイプについて述べている文脈では、概念図式は理論と同じ

45）Homans, G. C., *Sentiments and Activities : Essays in Social Sciences*, The Free Press, Glenco, 1962. pp. 44-46.
46）Parsons, T., 前掲書、1937年、邦訳、第一分冊、23頁。
47）Parsons. T., 前掲書、1977年、邦訳、176頁。この点に関してパーソンズは、もし理論を公理的前提とそこから演繹された検証可能な具体的事実に関する体系的な命題群と規定するなら、自らが産み出したものはたんなる概念図式と呼ばれるものにすぎないことを認めている。（Parsons. T., 前掲書、1977年、邦訳、86-87頁）。
48）Parsons, T., 前掲書、1937年、邦訳、第一分冊、23頁。
49）Parsons, T., 前掲書、1937年、邦訳、第一分冊、73頁。
50）Parsons, T., 前掲書、1937年、邦訳、第一分冊、55頁。
51）Parsons, T., 前掲書、1937年、邦訳、第一分冊、58頁。
52）Parsons, T., 前掲書、1937年、邦訳、第一分冊、58-63頁。
53）Parsons, T., 前掲書、1937年、邦訳、第一分冊、65頁。

ものとして語られており、なんら区別はなされていない。[54]（以下次号）

参考文献

Adriaansens, H. P. M., *Talcott Parsons and the Conceputual Dilemma*, London : Routledge & Kegan Paul, 1980.

————., "The Conceputual Dilemma," *British Journal of Sociology*, Vol. 30, No, 1, March 1979.

Alexander, J. C., "Formal and Substantive Voluntalism in the Work of Talcott Parsons," *American Sociological Review*, Vol. 43, 1978.

————., *Theoretical Logic in Sociology*, Vol. 1, Routledge & Kegan Paul, 1982.

Ayer, A. J., *Language, Truth and Logic*, Revised Edition, Victor Gollancz Ltd., London, 1946. A. J. エイヤー『言語・真理・論理』吉田夏彦訳、岩波書店、1955年。

Barber, Bernard, *L. J. Henderson On The Social System : Selected Writings*, Edited and with an Introduction by Bernard Barber, The University of Chicago Press, 1975.

Berger. P. L., *The Sacred Canopy–Elements of a Sociological Theory of Religion*, Doubleday & Co., N. Y. 1967. P. L. バーガー『聖なる天蓋』薗田稔訳、新曜社、1979年。

Brinton, Crane (ed.), *The Society of Fellows*, Cambridge, Mass. : Harvard University Press, 1959.

Black, M. (ed.), *The Theory of Talcott Parsons*, Prentice-Hall, 1961.

Blau, P. M. (ed.), *Approaches to the Study of Social Strtucture*, New York: The Free Press, 1975.

Conant, J. B., *On Understanding Science*, Yale University Press, 1947.

————., *Modern Science and Modern Man*, Columbia University Press, 1952.

Chalmers, A. F., *What is this called Science?*, University of Qeensland Press, 1979. A. F. チャルマーズ『科学論の展開』高田紀代志・佐野正博訳、恒星社厚生閣、1983年。

Culler, Jonathan, *Saussure*, Fontana Press, 1976. J. カラー『ソシュール』川本茂雄訳、岩波書店、1978年。

Durkheim, E., *Les Règles de la méthode sociologique*, F. Alcan, Paris, 1895. E. デュルケーム『社会学的方法の規準』宮島喬訳、岩波書店、1978年。

Fararo, Thomas J., "On the Foundation of the Theory of Action in Whitehead and Parsons," Loubser, Baum, Effrad and Kidz (eds.), *Explanation in General Theory in Social Science*, New York : The Free Press, pp. 90–112. 1976.

Habermas, J., *Erkenntnis und Interesse*, Frankfurt am Main, Suhrkamp, 1968. ユルゲン・ハバーマス『認識と関心』奥山次良〔他〕訳　未来社、1981年。

Henderson, L. J., *Pareto's General Sociology : A Physiologist's Interpretation*. Cambridge, Mass. : Harvard University Press, 1937.

————., *Sociology 23 Lectures*, 1941–42 edition, previously unpublished.

————., "An Approximate Definition of Fact," *University of California Publications in Philosophy* 14 (1932) : pp. 179–199.

————., "Science, Logic, and Human Intercourse," *Harvard Bisiness Review* April 1934, pp. 317–327.

————., "Pareto's Science of Society," *Saturday Review of Literature* 25 May 1935, pp. 3–4, 10.

————., "The Relation of Medicine to the Fundamental Sciences," *Sciences*, 82 (1935) : pp. 477–481.

————., "Physician and Patient as a Social System," *New England Journal of Medicine* 212 (1935) : pp. 819–823.

————., "The Practice of Medicine as Applied Sociology," *Transactions of the Association of American Physicions* 51 (1936) : pp. 8–15.

————., "What is Social Process?" *Proceedings of the American academy of Art and Sciences* 73 (1941) : pp. 457–463.

————., "The Study of Man," *Science* 94 (1941) : pp. 1–10.

Homans, George C., *Sentiments and Activities : Essays in Social Sciences*, The Free Press, Glencoe, 1962.

————., "Henderson, L. J." in D. L. Sills (ed.), *International Encyclopedia of Social Sciences*, New York, Macmillan, 1968, Vol. VI, pp. 350–351.

Homans, George C. & Bailey, Orville T., "The Society of Fellows, Harvard University, 1933–1947," in Brinton, Crane (ed.), *The Society of Fellows*, Cambridge, Mass : Harvard University Press, 1959.

Lemart, C. C., *Sociology and the Twilight of Man*, South Illinois University Press, 1979.

Lilienfeld, R., *The Rise of Systems Theory*, John Wiley

54）ヘンダーソンは日常的思考の概念図式と科学的概念図式という区別を立て、両者の異同を論じた際、科学的概念図式の例として物理学における原子の構成に関する理論、有機化学における分子の構成に関する理論、ウィラード・ギブズの物理化学システム、モーガンの遺伝子理論、ダーウィンの進化論などを挙げている。このことからすれば彼もまた概念図式という用語を「理論」と互換的に使用していたことが窺える。（Henderson, L. J., *Sociology 23 Lectures*, 1941-42 edition in Barber, B., op, cit., 1975, pp. 86-87.）

& Sons, Inc., 1978.

Losee, J. P., *A Histrical Introduction to the Philosophy of Science*, Oxford University Press, 1972. J. P. ロゼー『科学哲学の歴史』常石敬一訳、紀伊國屋書店、1974年。

Münch, R., "Talcott Parsons and the Theory of Acton I. The Structure of the Kantian Core," *American Journal of Sociology* Vol. 86, 1981, pp. 709–39.

Parascandola, John L., "Organismic and Holistic Concepts in the Tought of L. J. Henderson." *Journal of the History of Biology*, Vol. 4, No. 1, Spring, 1971, pp. 63–113.

————., "Lawrence Henderson and the Concept of Organized System." Unpublished Dissertation, University of Wisconsin, Madison, 1968.

Parsons, T., "Review of Mind and Society by V. Pareto and Pareto's General Sociology by L. J. Henderson," *American Economic Review*, Vol. XXV. 1935, PP. 502–508.

————., "Pareto's Central Analytical Scheme," *Journal of Social Philosophy.* Vol. I. 3, pp. 244–262, 1936.

————., *The Structure of Social Action*, McGraw--Hill ed. 1937. T. パーソンズ『社会的行為の構造』稲上毅・厚東洋輔・溝部明男訳、木鐸社、1976～1989年。

————., "The Role of Theory in Social Research," *American Sociological Review*, Vol. 3, pp. 13–20, 1938.

————., "The Roles of Ideas in Social Action," *American Sociological Review*, Vol. 3, pp. 653–64. 1938., reprinted in *Essays in Sociological Theory*.

————., "The Professions and Social Structure," *Social Forces*, Vol. 17, No. 4, pp. 457–67, 1939., reprinted in *Essays in Sociological Theory*.

————., "The Motivation of Economic Activities," *Canadian Journal of Economics and Polotical Sciences*, Vol. 6. pp. 187–203, 1940., repreinted in *Essays in Sociological Theory*.

————., "The Present Position and Prospects of Systematic Theory in Sociology," in Gurvitch, G. and Moore, W. (ed.), *Twentieth Century Sociology*, New York : Philosophical Library, 1945., reprinted in *Essays in Sociological Theory*.

————., "Sociology, 1941–6," *American Journal of Sociology*, 53, pp. 245–57 ; coauthor Bernard Barber, 1948.

————., "The Position of Sociological Theory," *American Sociological Review*, Vol. 13, pp, 156–71, 1948., reprinted in *Essays in Sociological Theory*.

————, . "The Prospects of Sociological Theory," *American Sociological Review*, Vol. 15, pp. 3–16, 1950., reprinted in *Essays in Sociological Theory* (Revised Edition 1954).

————., *Essays in Sociological Theory*, The Free Press, 1949.

————., *The Social System*, The Free Press, 1951. T. パーソンズ『社会体系論』佐藤勉訳、青木書店、1974年。

————., *Toword a General Theory of Action*, editor and Contributor with Edward A. Shils and Edward C. Tolman, Gordon W. Allport, Clyde Kluckhohn, Henry A. Murray, Robert R. Sears, Richard C. Sheldon, Samuel A. Stouffer, Harvard University Press, 1951. T. パーソンズ『行為の総合理論を目指して』永井道雄・作田啓一・橋本真訳、日本評論社、1960年。

————., "General Theory in Sociology," in Merton, R. K., Broom, L. and Cottrell, L. S., Jr, (eds.), *Sociology Today*, New York Basic Books, 1958.

————., *Social Structure and Personality*, The Free Press of Glencoe, 1964. T. パーソンズ『社会構造とパーソナリティ』武田良三監訳、新泉社、1973年。

————., "An Approach to Psychological Theory in terms of The Theory of Action," Koch Sigmund (ed.), *Psychology*, 1959.

————., The System of Modern Societies, Prentice-Hall, Inc., 1966. T. パーソンズ『近代社会の体系』井門富二夫訳、至誠堂、1977年。

————., "PARETO, VILFREDO : Contribution to Sociology," in D. L. Sills (ed.), *International Encyclopedia of Social Sciences*, New York, Macmillan, 1968, Vol. XI, pp. 411–415.

————., *Social Systems and the Evolution of Action Theory*, The Free Press, 1977. T. パーソンズ『社会体系と行為理論の展開』田野崎昭夫監訳、誠信書房、1992年。

————., *Action Theory and the Human Condition*. The Free Press, 1978.

Rocher, G., *Talcott Parsons et la sociologie americane*, Presses Universitaires de France, 1972, Translated by Barbara and Stephen Mennell, Thomas Nelson and Sons Ltd., in England, 1974.

Russett. C. E., *The Concept of Equilibrium in American Social Thought*, New Haven : York University Press, 1966.

Savage, S. P., *The Theories of Talcott Parsons*, The Macmillan Press, 1981.

Schwanenberg, Enno, "On the Meaning of the

Theory of Action," Loubser, Baum, Effrad and Kidz (eds.), *Explanation in General Theory in Social Science*, Chap. 1, 1976.

Wallace, W. L., *Sociological Theory*, Aldine Publishing Company, 1969.

———., *The Logic of Science in Sociology*, APC, 1971.

Weber, M., "Über einige Kategorien der verstehenden Soziologie," *Gesammelte Aufzätze zur Wissenschaftslehre*, Tübingen, J. C. B. Mohr, 1922. マックス・ウェーバー『理解社会学のカテゴリー』林道義訳、岩波書店、1968年。

———, "Soziologische Grundbegriffe," *Wirtshaft und Gesellshaft*, Tübingen, J. C. B. Mohr, 1922. マックス・ウェーバー『社会学の根本概念』清水幾太郎訳、岩波書店、1972年。

Whitehead, A. N., *Science and the Modern World*, New York : Macmillan, 1925. A. N. ホワイトヘッド『科学と近代世界』上田泰治　村上至孝訳、松籟社、1981年。

Whyte, William F. *Street Corner Society*, The University of Chicago Press, 1943. W. F. ホワイト『ストリート・コーナー・ソサイアティ』寺谷弘壬訳、垣内出版、1979年。

池上嘉彦『記号論への招待』岩波新書、1984年。

宇田川拓雄「パーソンズにおけるホワイトヘッド問題」社会学研究、36号、1978年。

加藤晴明「ホワイトヘッド　イン　パーソンズ」法政大学大学院紀要、第5号、1980年。

新明正道『社会学的機能主義』誠信書房、1967年。

———『タルコット・パーソンズ』恒星社厚生閣、1982年。

高城和義『パーソンズの理論体系』日本評論社、1986年。

———『パーソンズとアメリカ知識社会』岩波書店、1992年。

田中芳美『現代哲学の基礎』世界思想社、1992年。

富永健一『現代の社会科学者』講談社学術文庫、1993年。

丸山圭三郎『ソシュールの思想』岩波書店、1981年。

———『文化のフェティシズム』勁草書房、1984年。

森嶋通夫『思想としての近代経済学』岩波新書、1994年。